

2月~4月

O u r M u s i c S p r i n g

R e p l y



4月4日徹底研究シリーズ
ジョイント・コンサートにて(津田ホール)。お互いを称
えあうアレクサンダー・ガブリリユクさんと関本昌平さん。
「2台ピアノによるラフマニノフ:2台ピアノのための組曲
第2番作品17」は、記憶に残る名演となった。



「そこはもっと歌って!」身振り手振りに加えて、表情も豊かなマカロフ先生。



レッスンをしながら、自然と生徒の感情を引き出す手腕は見事である。生徒は関本昌平さん。



二人が演奏する姿は、そのラフマニノフのメロディとともに脳裏に刻まれた。



神童は真のアーティストになる為、完璧に近づく為、日々練習を繰り返す。そのプロセスの一部を、ステージで見せてくれた。



上・下)名古屋支部文化事業部の先生方。企画・運営の立役者だ。





4/2 ~ 4/4 世界一の師弟来日 ピティナっ子と共演も

ショパンエチュード公開レッスン &
ジョイント・コンサート

昨夏ピティナ・ピアノコンペティション審査員として来日、ショパンエチュード徹底研究で大好評を博したヴィクトール・マカロフ先生が、今年4月愛弟子を連れて再来日した。アレクサンダー・ガブリリュクさん、2000年11月浜松国際コンクールで優勝し、大きな話題を呼んだ逸材である。今回なんと、ショパンエチュードOp.25 公開レッスンに登場。シドニーのレッスン室がそのまま日本のステージで再現された。名古屋・しらかわホール、東京・津田ホール、いずれもほぼ満席で、指導者、学生は熱心に聴講していた。

公開レッスンは基本に忠実で、具体的な練習方法まで提示する内容。

「實川君に対しては、技術的側面に磨きをかけることで芸術性を高めていくレッスン。細かな音符がまとまらないように、口でタタタタタと言わせながら弾かせる、メロディーとベースラインの広がりを感じて弾く事、ペダルなしでインテンポで弾かせて自分の音をはっきり確認させるなど、細部に渡るレッスンを受けていくうちに、彼の音楽がすばらしく変化していくのが分かった。

関本君に関しては、ペダルの細やかな踏み方、響きの豊かな中身のつまった弱音を出す方法など、ハイレベルなレッスンがなされていた。背中に重さを感じて弾くようにという説明は彼をとて納得させたようで、みるみる響きが豊かに

なっていく。直弟子のガブリリュク君は、音楽的側面の成熟性を認めつつ、技術的な不安要素を克服するため、弾けないところをしっかりと頭でコントロールさせるように、繰り返し練習させていた。技術的な側面を強化しながら、音楽的には常にポリフォニックな感性を持ちながら表現することが大切と強調されていた。運動選手同様、120%の力で弾けていないと本番はうまくいかないというポリシーで、3人の若さ溢れるパワーが彼のレッスンについていけたことも印象的だった。」
(レポート:演奏研究委員会・田中克己先生)

そして、夜はピティナっ子とのジョイントコンサート。名古屋は田村響さん、関本さん、東京は関本さんと實川さんが共にステージに立ち、関本昌平さんはガブリリュクさんと夢のデュオ共演を果たした。二人の息がぴったりと合った素晴らしい演奏で、満場の客席からは拍手喝采が贈られ、終演後は楽屋にファンが殺到した(名古屋ではサイン会あり)。

名古屋公演の企画に携わった名古屋支部の大林裕子先生は、「満席のご来場者には心から満足頂き、私共も嬉しく思います。今回の企画は、3人のように若く優秀な人材がいたからこそ成立したもの。今後若手育成にますます力を入れていきたいですね。」と語っている。

左)終演後はサインを求めて長蛇の列ができた。
(名古屋公演)
右)實川君の豊かな表現力、関本君のピアニストとしての素質をそれぞれ誉めていたマカロフ先生。レッスン内容はオーソドックスで基本に忠実。ゆっくり弾かせて徐々に速くし、最後は指示速度を上回る速さで。安定的な技術を身に付けた上で、芸術的側面を磨いていく。さすがガブリリュクさんは慣れているのか、先生の手が目の前に迫っても、冷静に弾き続けている。